



**Gigantic. Mother**  
**南海部覚悟**



# 目次

プロローグ . . . . .	1
(1) . . . . .	2
(2) . . . . .	3
(3) . . . . .	5
(4) . . . . .	6
(5) . . . . .	8
(6) . . . . .	9
(7) . . . . .	11
(8) . . . . .	12
(9) . . . . .	14
(10) . . . . .	15
エピローグ (1) . . . . .	16
エピローグ (2) . . . . .	18



## プロローグ

瀬戸内の穏やかな汀を見下ろす、高台のアパートの2階部屋である。

猛暑の夏が終わりかけた海から、爽やかな潮風が吹きあがる。

半分開かれた木枠のガラス窓を通して、磯の香りが部屋を満たしていた。

6畳間に小さな木製の机を挟んで、一組の男女が対峙している。

女は大柄であった。

白のハーフパンツの上からチェックのシャツの裾をラフに結んで、小麦色の脛を揃えて畳の上に伸ばし、机上に片肘をつけて男の顔を上目遣いに見上げている。

「———どうしたの？ 私に何か言いたいことあるんでしょ？」

男は若く小柄で華奢な印象だった。

スキンヘッドとあっていい程、短く刈り込まれた蒼い頭皮に、眉間から微かな皺を走らせながら、青白く細い片腕を女の胸元に伸ばした。

女は腕を押し返すように拒むと、「———駄目よ今日は！ もうしないってこの前言ったじゃない！」

「私も寂しいからって・・・その時言ってたじゃないか！」

男がぼそりと呟く。

「あれが最後だからって———今日は顔を見るだけでいいって言ったの、あなたでしよう！」

拒まれた片腕をそのまま廻して木の机を横にずらすと、男は構わず女のシャツのボタンをはずし始める。

「やめて！ お願いだから・・・私たちの立ち場を考えて、人に知れたら本当に二人とも終わりよ、落ち着いて考えて、私もう40が近いのよ！」

後ずさりするハーフパンツが畳のイグサと擦れてこごもった音を立てる、寝具を積み上げた部屋の隅に追い詰められた。

夏布団に顔をうずめて嗚咽する女に構わず、立ち上がった男は黒いズボンと白いシャツを脱ぎ、下着だけになった。

「駄目よ本当に！ まだこんなに日も高いのに・・・。」

「この界限はね昼間誰もいないんだよ、知ってるくせに！ 下の部屋は空き家だし・・・。」

背中に回ってハーフパンツのベルトを外すと、下着と一緒にゆっくりと引き下ろす、白い臀部が露になった。

女には、ビーナスの髻のすぐ下に小さな母斑があった、西に傾いた陽光がその部分をスポットライトのように赤く照らし出して、眩しかった。

男は袂にあった学生帽で覆って、陰部の谷間に顔をうずめた。

(1)

「それで二人とも怪我なかったの？ ガケ崩れに、乗ってた車が押し流されたんでしょ？」  
広島大学の穴見の個室をカップルが訪れていた、例によって長いキセルの電子タバコを  
ふかしている。

「流されたところが浅い海で土砂もそれ以上こなかったし、車のドアがすぐ開いたもので  
すから、二人ともかすり傷くらいで・・・。」

「先輩、ちゃんと足が立つのに溺れる溺れるって・・・てっきり怪我しているんだと思っ  
て泥だらけになりながらおぶって逃げたんですよ！」

「事故の処理が終わって、念のため近くの病院に入院して検査の前にシャワーを浴びたら  
あっちこっち擦り傷だらけで・・・。」

「———大事なところから、広島のカキでも出てきたんじゃないの？」

穴見の卑猥な冗談に、笑子の目じりが引き攣る。

「でも、小さな内陸地震でよかったわね、被害もそんなに酷くなかったし。」

「でも、南海トラフの臨時情報はそのまま継続されましたわ、まだ何週間か緊張が続  
きます。」

「アメリカは大噴火で国中めっちゃめっちゃだし、中国は民主運動に伴って全土で内乱が起  
きそうだし・・・この先世界は如何なっていくのかしらね。」

「それで先生、今日は？」

「———ああ、そうだった！ わざわざ来てもらったのは、丁度あんたたちがガケ崩れで  
難儀してたのとほぼ同じ時刻に、同じようにガケ崩れに遭って亡くなったおじさんがい  
るの。」

「地震のせいで溪流の斜面が崩落、下流にいた被害者を襲ったみたい。死因は脳挫傷、崩  
落した岩かなんかが頭を直撃したようね。他の部位の損傷が殆どないから、土砂の本流  
からは離れていたんだと思うわ。」

「溪流釣りでもしていたんですか？ 近くに仲間？」

「一人だったそうよ、臨場報告書によると普段着の上に白衣姿って書いてあるから、釣  
りに来てたんじゃないわね。発見者は中国電力の施設維持スタッフで、現場近くの送電線  
で地震後の不具合を確認しに山に入ってたみたい。」

「その遺体の変なのよ、死因は脳挫傷に間違いはないんだけど、生活反応のない圧迫痕が背  
中一面に存在するの、この写真みて———。」

そう言いながら机上のキーボードを操作すると、モニターに俯せの男性全裸体が表示される。

「―――少し拡大するね、ほら皮膚の表面に小さな六角形の痕跡が拡がっているでしょう、こんなの私も見たことない……。」

モニターをよく見ると、正確な正六角形のパターンが蜂の巣のように背中一面に拡がっている。

「生活反応が無いっていうのは？」

「浮腫や皮下出血じゃないのよ、死斑は腹部や胸にきれいに出ていたし、血流停止後に六角形に圧迫されて、隣の六角形との隙間が土手のように盛り上がった皮膚組織が、そのまま残ってるみたい。」

「この時点で、死後どのくらいですか？」

玲子が女医に振り向きながら訪ねる。

「一週間ってとこね、肋骨や内臓の圧潰も殆どないから岩や土砂で圧迫されたんじゃないわ、それ程重くないもので長時間じわじわ押されたんだと思う。」

モニターの映像を拡大しながら、しげしげ見ていた笑子が甲高い声を出す。

「先輩！ここに何か書いてあります！」

最大限に拡大された六角形の一辺に平行に沿って、次のような一列の反転文字が確認できた。

“MOTHER”

## (2)

広島県三次市から北西に1時間ほど、島根との県境の林道を一台のジムニーが景気よく砂塵を巻き上げながら、西に走り抜ける。

車内に4人の男女、うち一人は手足の長い外国人である。

「ねえ奥寺君！如何していつもこの窮屈な4WDなの！ジョン・クアリの足が邪魔で荷物が置けないじゃない。」

笑子がリヤシートから大声を上げる。

「ダートを長時間走るのは、これに限るんだよ！ドライブレコーダーの映像を、本部で常時モニターできるしね。それに、今回軽じゃないから少しは楽じゃないか？」

「極限に乗り心地悪いのは、相変わらずね！」

「そんなことより笑ちゃん、被害者の詳細は分かったの？」

前から玲子が声をかける。

「小野寺亘 65 歳——尾道市出身の学者です。専攻は材料機能工学、イギリスオックスフォード大学で教えていたのが 5 年前に退職帰国したようです。」

「——家族は？」

「尾道に親戚が数人いるだけで、他に身寄りはありません。一度も結婚しなかったようです。」

「尾道に住んでるの？」

「いえ、広島市横川に住民票があります。令状がないので中は見れませんが、ごく普通のマンションです。皮膚に反転文字が残ってたのは事故じゃなく事件の可能性もあるってことでしょ、家宅捜査したほうが良いんじゃないですか？」

「それを確かめに今から現場に行くのよ。何？ さっきからニヤニヤして・・・。」

「ジョン・クアリは昨日からルンルン気分なんですよ、山に入れるって！」

そういいながら隣の外国人を振り返る。

「あんた、この前みたいに気持ち悪い虫をかき集めるつもりじゃないでしょうね！」

慌てて足元の大袋をシートの下に押し入れる、白い歯をむき出して更にニヤつきはじめた。

やがて、林道が内側にカーブした沢の根元に猫の額ほどの広場があって、一台のパトカーが止まっている、制服姿の巡査が軽く手を挙げて、ジムニーを停めた。

「三次署の担当のものです、お待ちしていました。此処から私がお案内します。」

被害者の遺体が見つかった現場は、車を停めた広場から 5 分ほど沢を下った、溪流の岩場にあった。

直ぐ上の山肌が大きくえぐれて、土色の断崖が痛々しい。

「ご遺体は、ここに俯せに横たわっていました。」

澤田と名乗った巡査が、川砂利の集まった大きなくぼみを指さした。

「中国電力の作業員が第一発見者と聞いていますが？」

玲子がくぼみに降りながら、呟いた。

崩落した山肌の更に上の送電鉄塔を指さしながら、「あそこで作業していたら、何やら銀色に輝く大きな塊が見えたらいいんです。仕事を終えて念のため確認しに降りてきたら、その場所に被害者が横たわっていたそうです。」

「銀色の塊？ 見覚えは？」

「今まで見たことも無いって言っていました。微妙に形を変えるから、UFO だったかも知れないって、真剣な顔でした。」

「UFO ですか・・・。」

奥寺が溪流の対岸を見つめながら呟く、「玲子さん、あすこにも同じようなくぼみがありますね。」

岩を伝って対岸に渡ると、同じように川砂利が集まったくぼみが二つ並んでいる。

さらにその先の灌木の中を、草木を大きく押し倒しながらずっと先に続いている。

「何か大きなものが移動した後ですね！」

「——崩落した岩じゃないの？」

笑子が後に続きながら大声を上げる。

「方向が逆だよ、山を登ってる！」

やがて小さな尾根に登りつき、眼下の視界が開けたその瞬間、全員の意識が凍り付いた！ガケ崩れの支流がこっちにも流れ落ち、尾根の下の平場に溜まって泥田のようになっている、そこに明瞭に印されていたのは・・・巨大な人の足型・・・3 mはありそうな人の足跡がずっと先の森の中まで続いていた。

### (3)

日帰りで本部に帰庁する予定が、三次市に宿泊することになった。

現場を案内した澤田巡查を含む5人が、古い旅館の和室で奥寺のパソコンモニターを覗き込んでいる。

「ほら、この足跡の表面、被害者の背中の圧迫痕と同じ六角形が広がっていますよ。」

いっぱい拡大したモニター画像は、足型の底の明らかな図形パターンを捉えていた。

「鮮明じゃないけど、反転文字もあるみたいね・・・。」

「ねえ奥寺君、これが人間の足跡だとしたら、身長は一体どれくらいになるの？」

笑子がモニター画像のスケール表示を見ながら尋ねた。

「足型の長さから歩幅から概算すると、18 m～20 mってところかな・・・。」

「———怪獣並みね。」

「だったら先輩、被害者はその怪獣人間に踏みつけられたってことですか？」

「18 mの人間は、単純に体積比で考えると70 tにもなる。仮に半分の35 tだとしても、踏みつけられた遺体が原型を留めているとは考えにくい。」

「———あのお、ちょっといいですか？」

巡查の澤田が横から口を出す。

「2年ほど前まであの地域の駐在所を任されていたんですが、昔から妙な話があるんですよ。5年前にある宗教団体が山の中腹に巨大な観音像と、お堂を設営したんです。竣工して開眼した直後から、深夜に観音像が歩いているのを見たって噂が立って・・・。」

全員頭を挙げてお互いの顔を見る、蒼白の表情がみな不安げだ。

「その観音像、高さはどのくらい？」

奥寺が尋ねる。

「台座の上から頭のとっぺんまで、20 m丁度だと聞いています。」

「明日の現場調査のあと、見学できないかな？」

「管理会社に連絡しておきます！」

次の朝、目を覚ますと県警本部からの調査隊が到着していた。  
玲子の指揮のもと総勢 30 名で現地に向かう、何処から聞きつけたか数名のプレススタッフも同行するようだ。  
足跡の見下ろせる昨日の尾根に立つと、全員思わず大きく呻いた、押し殺した話し声がそれに続く。  
平場に入るには、危険な崩落斜面を横切る必要がある、昨日は装備もなく人手も足りなかったの、そのまま引き返した。  
ザイルを使い安全を確保しながら平場に降りる、崩落した土砂はまだ一部ぬかるんで足を取られた。  
目の前にした足型は想像以上に巨大なものだった。  
奥寺がレーザーメジャーを使って計測し始める。  
斜面から湧き上がるように砂塵が風に舞う。  
音にならない微かな振動が辺りを包み込み始めた。  
青かった空が俄かに灰色の雲に覆われ、風の音がおどろおどろしく人々の不安を掻き立てる。  
みるみる周囲が暗くなり、一閃の稲光がすぐ近くの大木を大音響とともに粉碎した。  
同時に大粒の雨が一気に叩きつけ、一行の視界を瞬く間に奪った。  
「——危険ですから一旦尾根まで退避します！」  
玲子の甲高い声が周囲に木霊した。  
最前からの微かな振動が少しづつ強くなり、やがて腹を打つ轟音に変わった。  
かすむ視界に目を凝らすと、向かいの森の中で何やら銀色の塊が蠢いている——。  
その時だった！ 銀色の物体が稲光の手前に一気に立ち上がる！  
人間だった！ 女だった！ 廻りの巨木を見下ろすように銀色全裸の女体がそこに立っていた・・・。

#### (4)

調査隊は全員がパニックに陥っていた、てんでんばらばらに走り出し、岩に躓いて斜面を転げ落ちる者、ザイルを奪い合い我先に尾根に逃げる者、倒木の枝を振り翳して身構える者、收拾のつかない混乱が雷雨の山中を覆ってゆく。  
巨大な銀色の女体は、輝く両眼で一頻り周囲を見渡した後、踵を返して森の奥へと消えてゆく。

「―――奥寺！ ジョン・クアリ！ あとを追って！」

玲子の甲高い命令が響き渡る、笑子の方に振り返ると、「あんたは、私と一緒に他の隊員を集めて！ 尾根まで避難させて全員の安全を確認するのよ！」

すぐ横で巡查の澤田が、足に怪我をした隊員をザイルに捕まらせて押し上げようとしている、全員ずぶ濡れだった。

雨脚が穏やかになった。

同時に濃い霧が森を満たし、ともすれば巨大な女体を見失いかける。

奥寺もジョン・クアリも全身泥だらけで灌木の中を追いかけていた。

木々の下草の棘で、手足が痛い。

急に女体が歩くのをやめて停止した、腰を落して蹲る。

倒木の陰に身を隠し、様子を窺いながら何かを見極めた奥寺が背後から恐る々近付く。

「―――オクデラサン、危ナイ、危ナイ！」

ジョン・クアリが押し殺した声で喚起する。

唇に人差し指を立てながら更に近付き、女の踵に手が届く位置までにじり寄った。

女体の表皮は、人間の肌には程遠い金属光沢の滑らかさに覆われ、被害者の遺体の背中と同じ六角パターンが何処までも続いて拡がっている。

笑子の云っていた反転文字のタイプも確認できた。

六角形と六角形の間に僅かに隙間があって、内部から青白い光が漏れているようだ。

再び音にならない微かな振動が周囲を包み込む。

前回同様一気に轟音へと変わると、女の形が変化し始めた、「トランスフォームだ！」

慌てて倒木の裏側に逃げ帰った奥寺が、ジョン・クアリの顔を見ながら叫んだ。

女体の形が崩れ、丸餅を押し潰したような巨大ドームに変化した。

ドームの表面がうねうねと揺らぎ、隙間から光を漏らし続ける。

そのうち上の方から六角形の一つが剥がれ落ち、地面に転がった。

それを合図に次から次へと剥がれ始め、ドーム本体が上から下へ脱落・消滅していく。

地面に転がった六角形に複数の触手のようなものが現れ、蜘蛛の子を散らすように周囲の森に消える。

「―――ジョン・クアリ何やってる！ 早くかき集めないか、大袋はどうした！」

振り返って覗くと、引き攣った顔の厚い唇が震えている。

「如何した！ 大好物の虫の大群だぞ！」

「―――コンナノ喰エマセン！ オクデラサン！」

足を這い上がる数匹の六角形を、気味悪そうに払い落とした。

(5)

「巨人と遭遇した報告書って、どう書けばいいんですか？ 刑事部調査隊長なんだから、先輩書いてくださいよ・・・。」

「何言ってるの、私が文章作るの苦手なのは知ってるでしょ・・・適当にまとめといてくれれば、ハンコ押して提出してくるから。」

広島県警本部刑事部屋は閑散としていた。

事案の性質上、责任担当部署が警備部に変更され、警備部への応援として男性刑事の大半が動員された。

玲子たち女性刑事は、事件の背景調査のため県警本部に残されている。

「女の巨人だからって、男性警察官だけ集めて現場に送り込むのは、変な話だと思いませんか？」

「全裸だっるのが効いてるんだわ、幹部たちにセクハラを意識がない証拠よ！」

事案の認識が甘い県警幹部とは裏腹に、メディアの反応は盛大だった。

【深山に出没する全裸の巨大美女！】

【6角の銀鱗が全身を覆う身長20mの美女！】

【安芸の国の山中を全裸で歩く観音像！】

【聳え立つ女体に全身が震えた！】

主に男性読者をターゲットとした新聞各紙の見出しは、県警幹部と同様セクハラへの配慮を欠いたものだった。

ネット上の書き込みがこれを批判し、TVのワイドショーがそれに油を注いだ。

事案の本質から乖離した部分で、日本中に論争が沸き起こったのである。

「これから如何するんですか先輩、刑事部屋で一日椅子温めてる訳にもいかないし・・・。」

「小野寺亘って人物を、もっと詳しく調べる必要があるわね。どうして5年前日本に帰ってくる必要があったのか？ そもそもどうして渡英したのか？ どうして生涯一度も結婚しなかったのか？ 出身地の尾道で聞き込むしかないわ。」

ドアの鴨居にしこたま額を打ち付けながら、ジョン・クアリが刑事部屋に入ってきた。

「―――何だ、あなた現場じゃなかったの？」

「銀ノ6角ノムシ、ワタシニガテデス、一課長ニタノンデ現場キャンセルシテキマシタ。」

「銀色の大きなお尻に興味ないんだ・・・。」笑子が茶化す。

「―――じゃ、私たちと一緒に来なさい、尾道で聞き込みよ。」

尾道に向かう前に、SRIのラボに寄ることにした、あの雷雨の中七転八倒しながらも、奥寺は3匹の6角虫を捕らえて持ち帰っていた。

「―――あの巨人の正体が粗方見えてきました玲子さん！」

ラボに入るなり、奥寺が嬉しそうに駆け寄ってくる。

「捕まえた六角虫は何だったの——？」

「——昆虫ロボット、ほら昔福岡で遭遇したマイクロ・ドローン、あれと同類です。」  
そういいながら、標本瓶からピンセットで摘み上げたひとつを3人の前に突き出した、ジョン・クアリが顔を顰めて後退りする。

スーツのボタン程の大きさの銀の正六角板、6つの各辺から長い触手が一本ずつ伸びている。

「今は電源をショートさせていますから、停止していますが、ここに持ち込んだときは触手を使って標本瓶の中を盛んに動き回っていました。」

「本体の素材はチタン合金、軽くて強靱です。そしてこの触手が特殊なんですけど……。」  
そういいながらポケットから小さな糸巻きを取り出した、ミシンで使うボビンのようだ。巻かれている糸を引き出し適当な長さに切ると、「何もしなければただの糸ですが、こうやって両手で掴んで圧縮すると……。」

細い糸がどの方向にも撓まない、一本の細い棒の状態で奥寺の腕の力に耐えている。

今度は、分厚いメモ帳の上から垂直に垂らして、近くにあったハンマーで上端を叩いた。いとも簡単にメモ帳を突き通した。

「CSF（Compression Stiff Fiber：圧縮剛性繊維）といいます。10年ほど前の材料機能工学の成果です。」

## (6)

「その触手がどうなるの？」

「本体の中に電磁コイルがあって、触手の先端に磁束が集中します。つまり、他の六角虫と触手を介して物理的に結合されるんです。その上で触手を押したり引いたりすれば……。」

「——どうなるの？」笑子が口をはさむ。

「膜（メンブレン）状に結合された六角虫の集合体は、基本的に連続した面ならどんな形にでもトランスフォームすることが出来るんだ、観音像だろうが女体だろうが、潰れた餅だろうが……。」

「動力源は？」

「全個体フッ化物イオン電池が実装されていました。充電するために集まってトランスフォームするんだと思います。」

「つまり、六角虫の中には一次電源に特化したのがいるってこと？」

「そう！5年前に安定核原子炉の全システムを集積したデバイスが開発されたのをご存じですか？六角虫のイオン電池と大きさがほぼ一緒なんですよ。」

「充電間隔はどのくらいなの？」

「6角虫の活動量にもよりますが、5日程度だと思います。」

「だったら、全ての6角虫に安定核原子炉を実装すればいいじゃない？」

「熱の問題があるんだと思うよ、消費されない原子エネルギーは排熱として捨てなきゃならない、6角虫全てが原子炉持ったら、とんでもない発熱量になる。」

「——ああ思い出した！ 大分の久住高原の蛇！」

「それら全てを統括しているのが、同様に実装されているマイクロコンピュータです。そのプログラムとデータフィールドを今解析中です。」

「亡くなった被害者が、6角虫を製造したって考えてるの？」

「そうだと思います。唯ひとつ分からないのが……。」

「どうして6角虫に踏まれたかってこと？」

「20 mの巨人にトランスフォームしていても、中空のメンブレンなら総重量はせいぜい2 t程度です、背中にあんな圧迫痕を、それも着てる服の上から生成せしめる為には、少なくとも10時間以上同じ位置で静かに踏み続けないと……。」

「山中にも関わらず、普段着の上から白衣ってのもおかしな格好ね。とにかくプログラムの解析が終わったら、知らせて——。」

小野寺亘の、尾道の親戚からの聴取は、これといった成果もなかった。

【小野寺家は江戸後期から続く廻船問屋の名家であること。亘は生まれた直後に母親を亡くしたが、学業が優秀であった為、尾道の高校を中退し、父親の友人宅にホームステイしながら、英国に留学したこと。その後小野寺家は事業に失敗し、父親の急逝も重なって没落、一家は離散した。亘はホームステイ先の支援を受けながら、英国で博士号を取得し、研究者となった。帰国して広島に住んでたこと、地震で亡くなったことなんて、知りもしなかった……。】

「何だか酷くよそよそしい感じでしたね。」

「大切なことを隠してる口振りだったわね、中退した高校ってのは？」

「——この近頃らしいですよ。」

事務長だという初老の女性職員が持ってきた卒業写真を見て、目を見張る。

モノクロの集合写真の欄外に、丸い顔写真があった。

「——ああ、その欄外の丸いのが小野寺さんですねえ。撮影日は休まれていたんでしょうねえ。」

ただ目を見張ったのは、その写真ではない。

集合写真の中に、ひと際背の高い私服の女性がいた。

「——この方は？」

「ええっと……長谷川佑子教諭、クラス担任ですねえ。」

「この先生は今？」

「当の昔に亡くなられたようです……。」

「——ご家族は？」

「妹さんが、尾道に住まわれていると聞いてます……。」

(7)

JR 尾道駅の北、土堂小学校を見下ろす坂道の上に、身に纏うヘデラに歴史を刻み込んだ、風格ある洋館が佇んでいる。

高い天井に高貴さが漂い、アップライトピアノの深い光沢が眼に柔らかで心地いい。

尾道水道を見渡す大きなガラス窓の応接室で、カップルは家主を待っていた。

車いすと一緒に一組の男女が部屋に入ってくる。

背後に立って車を押す男性は40代か・・・いすに腰を下ろした女性は遥かに高齢である。

大柄な車いすの老女に比して、男性は華奢で弱々しかった。

「長谷川佐子さんでしょうか？ 広島県警の黒木といいます。」

「——警察のお方が、どんな御用じゃろうか？」

凛とした声で老女が尋ねた。

「長谷川佑子さんは？」

「私の、姉じゃが・・・。」

「じゃ、この少年はご存じありませんか？」

笑子が卒業写真欄外の丸い顔写真を、スマホの画面に表示した。

老女は顔を閉じ、暗い顔で押し黙った。

「この方が、5年前にイギリスから帰国されていたのはご存じですか？」

「あんた方、小野寺亘のこと調べに来たんかいのう？」

長い沈黙が続いて、老女が意を決したように顔を上げた。

「この子が手紙出したんよイギリスに・・・そしたら、帰ってきよった。」

「——この方は？」

「小野寺の倅じゃが・・・。」

「いずれ、来らっしゃるじゃろう思うとったが、婦警さんとはのう・・・。」

「——姉と小野寺のことを訊きたいんじゃろうが。三次の怪物は小野寺の仕業じゃけえ。」

先を越された笑子が、思わず手に持ったスマホを落としそうになる。

車いすから、窓の下の長いカウチに落ち着くと、老女はゆっくり話し始めた。

「64年の東京オリンピックが終わって、暫く女子バレーがブームじゃったんじゃ。姉は身長が丁度2mあってのお、将来を囑望されたバレー選手じゃった。それがあある事故で膝を痛めて、選手生活にピリオドを打った。尾道に帰って教員免許を取って、後で小野寺が入学する高校に体育教師として赴任した。」

過去の記憶を明瞭に紡ぐ為か、時折瞼を閉じ深い眠りに落ちるように、穏やかな静寂を食る。

「どっちが悪いんだか今じゃ詮無きことじゃがの、気が付いたら二人は良い仲になっておった。向島の姉のアパートに、何度も訪ねて来たようじゃ。」

「尾道のような小さな町じゃ、人の口に戸は立てられん、噂になりかけた時に、小野寺の当主が動いたんじゃ。卒業前に亘を外国に留学させて、関係者に金を渡して口を封じた、議員や教育委員会にも圧力をかけて、この件に関して永遠に籍口令を敷いたんじゃ。」

「姉も、何とかその年の卒業式までは教えとったが、居た堪れんかったんじゃろ、新学期が始まる前に教師を辞めたわ・・・。」

「その時にゃ、この子がもう腹の中におってなあ、下ろす訳にもいかん、不憫じゃったわ・・・高齢の初産じゃし肥立ちも悪うて、産んでひと月後に亡うなってしまった。」

「私も、結婚できん体で家でゴロゴロしとったから、この子を引き取ることにしたんよ・・・。父親はイギリスで偉い学者になっとるって、初めて打ち明けたんが6年前じゃ。この子が手紙を出して直ぐに本人がやって来おったわ、認知したいゆうてのう。二人ともいい歳して認知もなからう・・・今更何の話かちゆうて、早々に引き取ってもらったんよ。」

「じゃが、この子は連絡を取り合っていたようじゃ、そしてこの前見せてもろうたのが、メールで送られてきたこの映像じゃ・・・。」

老女が促すと、男性が車いすのポケットからタブレットを取り出して、ビデオを再生し始める。

そこにはあの銀の巨人が映っていた、場所も同じ山中の溪流、背景の山肌に見覚えがある。

巨人は岩場の間をゆっくりと歩き回った後、頭部から崩壊して無数の六角虫にトランスフォーム、その背後から白衣の小野寺亘が現れた。

画面に近づいて、手を伸ばすところでビデオは終わっていた。

「肌の銀色以外姉の体にそっくりじゃ、尻の上の赤痣もちゃんとある。本人の説明じゃ機械で動く造り物で、姉の体の10倍もあるという、私じゃ気味が悪うなった・・・。その小野寺がどうかしたんかい？」

「――先日の地震によるガケ崩れで、お亡くなりになりました。」

カウチに深々と沈みこませていた体を一瞬持ち上げて、「そうかえ・・・それも、不憫じゃのお。」

(8)

笑子のスマホにコールが入る。

「三次署の澤田さんからです、6角虫が再び集まり始めたって、トランスフォームする可能性があるから、直ぐ現場に来て欲しいって・・・。」

老女の方に向き直った玲子が、「有難うございます、お陰ですべての謎が解けました。亡くなった小野寺亘さんとお姉さまを模した機械人間に関しては、警察が責任をもって対処いたします。お身内の立ち入った内容まで、ご説明頂き感謝いたします。全てが決着しました後、所轄よりご説明に上がるかと思しますので、それまでどうか心穏やかに過ごしてください・・・。」

そういつて、深々と頭を下げた。

坂の下の駐車場に、車と一緒に待たせているジョン・クアリと携帯で連絡を取りながら、屋敷を後にする。

玄関まで見送りに降りてきた老女が、「ちょっと待ちなされ・・・さっき礼を言うてくれたあんた、あんたずっと昔、この近くに住んどらんじゃったかのう？ 屋敷の周りを走り回った童の顔に、面影があるんじゃが。あんたがた二人も尋常な間柄とは見えんが、気を付けなされ、災いは身近にあると言うからのう。」

ハッと向き直った玲子に、老女は優しい眼差しを投げかけていた。

「――笑ちゃん、あなた尾道署に残ってさっきの車いす押してた、被害者の子供っていう男性のこと、詳しく調べて。」

細い坂道に気を使いながらハンドルを切る笑子に、助手席から指示を出す。

同時にスマホを取り出して、「ああっ！ 穴見先生、先日のガケ崩れで亡くなった男性の件ですけど、事故以外には考えられませんか？ ひょっとして他殺ってことは？――そ、そうですか！ ぜひ、再検証お願いします！」続けて掛け直し、「ああ、奥寺君！ あなた悪いけど、被害者の横川のマンション、家宅捜査してくれない。刑事部長に捜査令状準備させるから、殺人事件かも知れない・・・その積りで捜査して！ それと、6角虫のプログラムの分析はどうなった？」

「制御プログラムの解析は終わったんですが・・・データフィールドの方が3個体だけじゃ断片的過ぎて・・・。」

「分かった、今三次の現場に向かっているから、ジョン・クアリに集めさせる。大丈夫、嫌がっても無理矢理やらせるわ！」

後ろの席で、電話の話を聞いていたジョン・クアリが丸い目玉を飛び出さんばかりに見開いて、「コレ殺人ジケンナンデスカ？ ダッター私、我慢シテ銀ノムシ集メマス！」

何時になく真剣な表情で、スマホを握りしめる玲子を見ながら、ハンドルを握る笑子が心配そうに声をかける。

「――どうしたんですか先輩！ ひどく興奮してますよ！」

尾道署の駐車場に車を止めながら、笑子とジョン・クアリが玲子に詰め寄った。

「説明してください、このままじゃここに残れません！」

「――見えたのよ！」

「――何が？」

「さっきのビデオ――、画面の奥に地震で崩落した山肌の断崖が映ってたのよ！」

(9)

100人を下らない機動隊とプレススタッフが、森の中を駆け回っていた。

彼らの視線の先に、六角虫の群れが蠢いている。

最初の渓流の現場から、山塊を一つ回り込んだ森の斜面を移動中だ。

六角虫は、一匹だけで這い回るものもあれば、数十匹平面状に繋がって、平べったいムカデのような状態で木々の間を移動するものもある。

遠くから眺めると、深い森の根元で、巨大な銀のベルトコンベアが、ざわざわ稼働しているように見える、例によって音にならない微かな振動が、辺りを包み込んでいた。

下草の密集する窪地で、ジョン・クアリが顔を引き攣らせながら奮闘している。

既に、麻の大袋の1/3くらいまで、六角虫を捕らえていた。

「大丈夫？ ジョン・クアリ！ 適当なところで止めて、上がってきなさい！」

機動隊員と一緒に先に行く巡査の澤田が振り返って、「黒木係長、このまま行くと以前話した観音像の場所に行き当たります！」

山の中腹を削って、野球グラウンド程に造成した中央に、西日を浴びて純白に輝く巨大な観音像が起立している。

先回りをしたプレスの一団が、朱塗りのお堂の前で、カメラの砲列を構えた。

お堂の前の広大な草むらに一面に拡がった六角虫の集団が、触手と触手の先端を繋げてお互いを持ち上げ始める。

微かな振動が再び轟音に変わる。

目の前で円錐状に立ち上がると、先端が五つに分かれて指になる、そのまま根元が細く伸びると、巨大な人の腕の形になった、豊かな膨らみが二つ並ぶと、艶やかな乳房になる、巨大な丘の裾に深い谷が入り、やがてどっしりとした臀部が現れた、あちこちで人間のパーツが形成されてゆく。

傘が開く前のキノコのような出っ張りが、ひときわ高く立ち上がると、周りにパーツが集合する。

キノコはさらに高く、首がくびれて顎が尖る、口と鼻が形成され、眼窩に眼球が入って光が灯った。

集まった体のパーツが所定の位置に配置され、全身の六角の隙間から青白い光が明滅し始める。

銀色の巨大女体が完成した。

女体はゆっくりと歩いて、観音像の直ぐ正面に対峙する。

陽光がひときわ強くなり、観音像の白が一層輝き始めた。

その時である！

しなやかに持ち上げた両腕を観音像の首に廻し、顔を接して口づける、僅かに首を傾げ上目遣いの脛が少し潤んでいるように思えた。

次の瞬間、女体が頭部から崩れ始めた、構成している六角虫が次々女体の顔や腕を伝って観音像に移動する。

そして、そのまま像の表面に張り付いてゆく、白かった表面が銀色に覆われる。

数分後、暮れなずむ朱色の陽光は、一面金属光沢の観音像を照らし出していた。

1時間後、隙間から漏れていた青白い光がゆっくりと消滅し、六角虫が観音像の表面から次々剥落して、足元にうず高く積もった。

何かが確実に息を引き取った瞬間だった……。

## (10)

尾道駅の北、ヘデラが覆うあの洋館を、カップルが再び訪れていた。

今日はタブレットを脇に抱えた奥寺も、同行している。

家政婦に案内され、尾道水道を見渡せる応接室で待っていると、車いすを押していたあの男性が現れた。

「長谷川仲郎さんですね……今日、佐子様は？」

「母は今体調を崩してしまして、今日は無礼させていただきます。」

家政婦が、酷く悲しそうな顔をして、部屋から出て行った。

「是非ありません。それでは仲郎さん、裁判所よりあなたに逮捕状が発付されています。」

「———どのような容疑でしょうか？」

「小野寺亘氏殺害容疑です———。」

笑子が書類を広げ提示する。

窓越しに海を見下ろしていた視線を、カップルに戻すと、「まあお掛けください、いまお茶を入れます。」

「お母様のお話ですと、あなたは小野寺亘さんがここに来られた後も、連絡を取られていた……。」

「メールは何度かやり取りしました。———父は先日の地震のガケ崩れで亡くなったんじゃないのですか？」

「仲郎さん、あなた地震の当日、お父様が亡くなった山中の溪流に、一緒に居られたんじゃないですか？そして、お父様があの銀の巨人を動かすのを直ぐ近くで見ておられた……。」

「——父は、ガケ崩れの落石の直撃を受けて死んだんです！」

「違います——。先日見せて頂いたビデオ、お父様が録画を止めにカメラに近付くシーン、既に崩落した山肌が映り込んでいました。お父様はガケ崩れで亡くなられたんじゃないありません、ガケ崩れがあった後に、誰かに殺されたんです！」

打ち沈んだ静寂が、部屋を満たす。

踏切の警報と列車のジョイント音が、遠くで重なる。

「証拠がありますか……？」

絞り出すような低い声だった。

奥寺が前に出て、タブレットの画面を立ち上げる。

「これは、銀の巨人を構成する昆虫ロボット、私たちは六角虫と呼んでいますが、そのデータフィールドから、電磁波センサーのデータを抽出し、可視光帯域に絞って解析したものです。」

そこには、岩場に屈みこんでビデオカメラを操作する小野寺亘の背後から、後頭に向けて石塊を打ち下ろす仲郎の姿が記録されていた。

「凶器の石も、20 m程下流で発見されました、土砂に埋まっていたんですが、お父様の血痕とあなたの指紋が確認出来ました。」

がっくり肩を落とした弱々しく華奢な男が、そこにいた。

細い両手を合わせて、玲子の前を出す。

「——2階の寝室で、高齢の女性が亡くなっています！」

同行の若い刑事が、蒼い顔をして部屋に入ってきた。

すぐ隣で、家政婦が顔を両手で覆い、嗚咽している。

「母は……今朝、亡くなりました。いま、救急車を呼んでいるところです。」

救急車が到着し、家政婦が同行して病院へ向かった。

眼下の駅から発車メロディが聞こえ、踏切の警報がそれをかき消し、渡船の汽笛が続いた。

洋館の壁を覆う、ヘデラが乾いた葉音を立てる。

手錠をマフラーで隠した男の頬に一条の涙が伝う……不憫であった。

## エピローグ (1)

「私も変だなあとには思っていたのよ、鑑定を依頼されたのが背中への圧迫痕に関してのみだったからね……。」

穴見の大学の個室に、カップルと奥寺が来訪していた。

電子タバコの香りが、部屋を満たしている。

「他殺の可能性を、どう判断したんですか？」

奥寺が質問する。

「ガケ崩れの落石なんかは多くの場合、かなりの自転を伴って落下するじゃない。その状態で頭を直撃すると、頭蓋陥没部に頭皮や頭髮が嵌入するんだけど、回転の方向で嵌入量が違うのよ。」

「押し込まれる方向と、押し出される方向があるってことですね？」

「そう、それが今回の場合どの方向にも一様に嵌入していたの、でも全ての落石が回転しているとは限らないし、確実じゃないのね。だから、玲ちゃんから電話があるまで問題だとは思わなかった、迂闊だったわ。」

といいながら、笑子の背後に回って後頭部を指差す、嫌がる笑子が手で払いのける。

「横川のマンションの捜査はどうだったの？」

穴見が奥寺に尋ねる。

「全メタル対応の高機能 3D プリンターが 3 台設置されていました。時間をかけて少しずつ六角虫を製造してたんでしょねえ。安定核原子炉のデバイスも、メーカー品を購入したようで、それだけでも相当な金額になります、全財産つぎ込んだんだと思います。」

「長谷川家の痕跡は？」

「一切ありませんでした、今回の件で迷惑かけたくなかったんでしょ……。」

玲子が続けて尋ねる。

「あなた、銀の巨人が被害者を踏みつけた理由が分からないって言ってたじゃない？」

「それについての答えは“白”でした。」

「———白？」

「観音像の白、被害者の白衣の白です。六角虫のような自律して行動するロボットを一点に集めてトランスフォームさせる為には、明確な基準点を示す方が制御しやすいんです。大気中のゴミが雪の結晶の核になるのと同じ理屈です。白色は山中や森の中では特に目立つ色で、六角虫の電磁波センサーに一番感知され易いんだと思います。」

「———それで、どうして踏みつけたの？」

「被害者は溪流で俯せに倒れていました。本来なら白衣の廻りに六角虫が集まって白衣を包み込むような形で組み上がっていくんだと思います。」

「銀の巨人の空洞の中に、被害者自身が包み込まれるってこと？」

笑子が目を丸くして聞き返す。

「そう、俯せで硬直も始まっていたから体の下側に潜り込めなかった、仕方がないから遺体の直上でトランスフォームしたんだと思うよ。」

「ねえ奥寺君、銀の巨人が 20 m、長谷川佑子さんの身長が 2 m、丁度 1/10 よ。六角虫のデータを縮小して 3D プリンターで出力すれば、少年時代に愛した女性の複製が作れるじゃない、被害者はどうして等身大で作らなかったの？」

「あのレベルの装置を 1/10 に縮小する為には、分子自体は縮小できないから、分子配列

を勘案して再設計する必要がある、出力も分子配列に対応した特別なプリンターが必要だ、被害者にそこまでの技術があったとは思えない。」

「——先輩、長谷川仲郎の経歴で、よく分からない部分があるんです。大学卒業後はっきりした職に就かず、主に佐子さんの世話をしながら暮らしていたようですが、ある民間企業のラボに足繁く通っていたようです。」

「——それは？」

「超微細加工技術研究所というんですが、長谷川はガンマ線を使った微細加工を担当していたようです。」

奥寺がいきなり立ち上がる。

「そ、それこそが分子配列技術の核心だよ！ 等身大の銀の女性が完成していたのかもしれない、きっとそうだ！ 親子で協力して作り上げたんだ！」

玲子が奥寺を落ち着かせながら尋ねる。

「——どうしてそう思うの？」

「6角虫の制御プログラムの中に意味不明の一文があるんです、“システム B が起動したらシステム A は 3,600 秒後にシャットダウンされる”と云うんですが、システム A が銀の巨人で、システム B が等身大の銀の女性なら……。」

「——じゃ、銀の巨人は試作品ってこと？」

「6角虫の金属表面に相応の樹脂コーティングを施せば、素人目には判別できないと思います。現時点で人型ロボットと生身の人間の一番の違いは、重量なんです。機械の詰まったロボットの方が遥かに重い、然るに今回の外骨格型のシステムであれば、中身は空洞ですから幾らでも人間の体重に近づけられます……。」

「既に何処か街中で稼働していると？」

「少なくとも、システム A が観音像の表面でシャットダウンされた一時間前に、どこかで起動された可能性があります。」

「どうしようも無いわね、見つかりそうになったら 6角虫にトランスフォームするんでしょ……。」

呆れ顔で穴見が呟く。

「——今度は、家ダニのサイズです！」

## エピローグ (2)

「長谷川仲郎の動機について、玲ちゃんはどう考えてるの？」

電子タバコのキセルを、ゆったりとふかしながら穴見が玲子の顔を見る。

「今回の件に関して、はっきりとした殺意を被害者に持ち得るのは、長谷川佐子さんだと思います。佐子さんから見れば、被害者は未成年とはいえ、実の姉を不幸の果てに死に追いやった張本人ですし、手塩にかけて育ててきた息子を、認知という形で取り上げられるって考えたかも知れません。」

「——そうねえ、自分は子供のできない体だったらしいしね。」

「佐子さんから、仲郎に教唆があったんでしょうか？」

笑子が身を乗り出して尋ねる。

「それは無かったと思うわ。高齢だし自分から被害者に対して何かすることはとても出来ないけど、だからといって、息子のこれからの人生を台無しにすることはもっと出来ない・・・本当は出て来て欲しくなかったけど、実の親子の血を断ち切ることも出来ない。優しそうないいお婆さんだったけど、辛かったでしょうね。」

「寧ろ、息子の仲郎の方がそれを慮ったんだと思うの。それに、実の母親に対する純粋な想いが、拍車をかけたのねきっと・・・。」

「——両方の母親に対する強い想いが、父親に対しての殺意を惹起させたわけですか。」  
奥寺がボソリと呟く。

「——でも、システム B は親子で協力して作った可能性があるんでしょ。」

笑子がキセルの煙を払いのけながら、奥寺に尋ねる。

「仲郎は、6角虫が何であるのか分からないまま、分子配列の技術だけ被害者に伝えたのかもしれない。銀の巨人を見たのもあのビデオを撮った日が初めてだったんだろう。」

「実の母親に対する、酷い侮辱と捉えたのね・・・きっと。」

「大学病院から、佐子さんの死因に関しての報告が来てたわ。急性心不全による心停止だって、巨人症によくある症例よ、薬物等自殺の兆候は見当たらないって・・・。」

「よく々考えると、被害者が長谷川佑子さんに愛情を抱いたのも、会ったことのない母親への想いが影響していると思う、6角虫ひとつひとつに“MOTHER”ってタイプしていた事からもね、二代に亘って見たことのない母への恋慕が、其々に鬱屈して招いた事件かも知れないわね。」

しみじみとした玲子の言葉が、その場を深い虚脱感で満たした。

長い無言の時間が流れる。

漂う気怠さをかき消すように、電子タバコの煙を細く束ねて笑子の顔に吹きかけると、  
「あんたの親戚の東恩納医師も、今回の被害者も、男っていうのはどうしてこう過去の愛情に拘る生き物なのかねえ。心理学者の友人に言わせると、不倫して離婚した男の愛情の本質は、ほとんどの場合もとの配偶者に向うらしいわよ！」

穴見の憤りが全員を現実に戻す。

笑子の質問が、更に現実を補強する、「仲郎が被害者と協力してシステム B を作ったんじゃないとしたら、誰がシステムを起動したんでしょうか？」

「被害者がタイマー設定してたんだろ・・・。」

「何処で？」

「あの、山中の何処かだろうけど、今となっては皆目不明だね・・・。」

穴見の個室を後にして、大学のキャンパスを駐車場へと移動しながら、笑子が玲子に話しかける。

「―――被害者の高校で卒業写真見たとき、被害者の顔写真よりも長谷川佑子さんの写真に注目したのは何故ですか？」

「銀の巨人に顔が似てると思ったの。一般に女性も、2 m近くになると面長になって、有名なプロレスラーのような顔立ちになるわ、でも銀の巨人は丸くて小顔で可愛らしかった。当たり前のことだけど、被害者が愛する人の顔を、きちんと覚えていたんだと思う。」一瞬、玲子の脳裏に、長谷川佐子の別れ際の言葉が蘇った、ひょっとしてあの人は、幼い頃の私を見て顔を覚えていたんだらうか？

同じことを、すぐ隣の笑子も感じていた。

後日、三次署の澤田巡查宛てに観音像を管理する業者から連絡があった。

観音像の足元に溜まっていた六角虫の山を処分した折、観音像のメンテナンス用ハッチが開けられていたことに気が付いた。

ロック錠が専用の器具で開錠され、何者かが出入りした形跡がある。

盗まれた備品は無く、代わりに一台のノートパソコンと机・椅子、複雑な構造の機械一式が置かれていた。

―――おわり。

本文に登場します、団体名、個人名は実在のものとは一切関係がありません。

悪しからずご了解ください。

また、諸般の事情により、本編より、ページごとの写真・イラスト等及び強調文字は廃止いたします。

合わせてご了解ください。

尚、表紙の写真は Photo AC 様より転載させて頂きました。



---

Gigantic.Mother

---

著 南海部 覚悟

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---